

な か ま

発行
佐倉市立中央公民館
なかま編集係

〒285-0025
佐倉市鍋木町 198-3
電話 (043) 485-1801

2 ページ 驚破!新種 村田 長保
3 ページ 郷土に根付いた 西馬音内盆踊り 高橋作久二

ふるさと自慢 斎藤 雄
出会いの人生輝いています 白石 義孝

ふるさとの山

あしたか
愛鷹

安 田 齊 治

私のふるさとは富士、箱根、愛鷹の各山に囲まれた、静岡県の小さな山村(現在は裾野市)です。この文章は、ふるさとを離れた三年目の二十五歳の夏に、よく登った愛鷹山を思いながら書いたものです。

私は愛鷹が好きだ。あの古

武士のような山肌がたまらない魅力である。ほりの深い横顔が茜色の夕映えにくっきり浮かんでいる姿は、なんとも言えない男性的な魅力である。春が来れば赤茶色の岩肌に、どこからか湧きでたように萌黄色の若芽がおう、まるで淡緑色のこけが生え、それがだんだんに広がるように。池の平の下に炭焼き小屋がある。その辺り一帯の色合いは実に美しい。一滴の水に、きみどりと淡黄色の絵具を落とし、水の中ににじみ、それぞれ

れの一端が水の中で溶け合い、全く違った一つの色彩を創りだしている。

しかも、それらが各々の趣を誇示しながらも、渾然たる調和をなしているように、愛鷹の一部、炭焼小屋周辺のそれも、やわらかい融合の美を示している。

この融合の「におい」をじつとみつめていると、柔らかな色彩の中から山の精霊、西洋のお伽噺にでる意地悪な奴ではない、が現れてあの美しい林というより、やわらかい色彩の融合の「におい」の中で、早春の喜びを乱舞しているような幻の世界に誘いこまれる。私はこの季節がたまらなく待たれる。今、緑の愛鷹も冬には富士からの冷たい風を受け、時には白雪を冠りその威厳さを見せる。しかし、春には若者が

発散する希望のように力強く躍動する。

夏の愛鷹は、何の変哲もない緑一色に包まれている。しかし、じつと見つめると色々な色彩が浮かんでくる無限の深さが感じられる。更にその中から絶えず発展してやまない命の美しい力が感じられる。

私が最後に愛鷹に登ったのは、学生生活最後の夏だった。昭和三十四年の八月であった。その時採って来たあげびは、今も愛鷹のにおいを実家の庭の隅々まで運んでいるだろう。

静かな林に一步踏み入った時、かわいらしい声でさえずる小鳥。モミ、ツガ等の喬木から、かれんな花をつけるコイワザクラ、ヤバネハハコにいたるまで多くの植物がある。これらの一つ一つが魅力ある愛鷹の素材となっている。

月見草は富士にだけ似合う花ではない。愛鷹にもよく似合う。その月見草も愛鷹の夏に、今咲き誇っているだろう。

(編集委員)

すわ 驚破！新種

臼井駅北口より稻荷台を経て実蔵院方面を散策した時、余り見かけない野草を発見した。

花卉が四枚の白い花で、葉はフキのようなウチワ型、高さ二〇〜三〇センチ程で、やや薄暗い大樹の下陰に群生していた。

臼井に越して来たばかりの頃、トラノオやキンラン、ギンラン、そしてウラシマソウ、ギンリョウソウ等を発見し散歩が愉しみだったが、最近は目新しい発見がなく、散歩も遠去かっていたが、久々に胸躍る出会いだった。

最初は花だけ、次には一株抜き取って植物図鑑と比べてみたが、中々ピッタリあてはまるものがない。これと固定できぬまゝ、花の特徴から「キンポウゲ科」と素人判断を下した。

花といっても全く萼がない

ので、恐らく四枚の花弁らしきものが萼なのではないか。

図や写真で見ると、シラネアオイの花とよく似ている。しかし、高山植物に近いシラネアオイが臼井に生える筈がない。

疑問のまま伊豆方面を旅した折、縁は異なるもの、不思議なもので、全く同じ花を玄関先で鉢植えで育てているのに出会った。早速持ち主に訊ねたところ、「シラユキゲシ」という答え。白雪芥子というところらしいが図鑑、辞書には載っていない。伊豆方面の俗称らしい。

仕方ないので歴博付属の植物園に持ち込んで調べてもらった。もし新種、新発見だったらという期待は伊豆で半分ついたが、まだどこかで不遜な高鳴りもあった。

数日して返事があった。
「ユリワサビ」だった。
(新臼井田 村田 長保)

ふるさと自慢

二〇〇六年の暑い夏は秋田出身の私にとつて、ふるさとの自慢話が二つできた。その一つは都市対抗野球大会東北第二代表として、秋田県にかほ市の「TDK」が三年ぶり九度目の東京ドーム出場を果たし、もう一つは全国高校野球大会で母校である本荘高校が秋田県代表として十八年ぶり三度目の甲子園出場を果たしたことである。

いずれも全国的に名を挙げた本大会出場である。このほかふるさと自慢を挙げれば限りがないが、そのことに関わりがない人には自慢話はあまり受けられないようである。

しかし自分自身の自慢ではなく、ふるさとや出身校のチームと選手の活躍ぶりが全国的に報道されるのは嬉しいもので、大いに誇りをもちたいと思っている。

わがふるさとの町は平成の

大合併を機に近隣三町が合併して名称が「にかほ市」になった。松尾芭蕉の奥の細道で知られる象潟、南極探検の権威者白瀬陸軍中尉の出身地である旧金浦町、それに仁賀保高原から望む鳥海山と日本海の絶景は、何度眺めても飽きることがない。

毎年東京で、関東地区在住者私たちのふるさとの集いや各地域それぞれの中学・高校卒業生を対象とした同窓会が開催されている。私の母校も例外ではない。

私はこの種の催しに参加すること、普段中々会えない知人や旧友と再会し、郷土料理に舌鼓を打ちながら、若き日の思い出やふるさと自慢の話に花を咲かせている。

このようなことで現世の雑草の中を、前向きに生きる癒しを図りたい。ふるさと自慢は大いにすべし。

(石川 斎藤 雄)

郷土に根付いた

にしもない

西馬音内盆踊り

誘ってくれた、四十数年
来の秋田の親友が是非見せて
あげたいと常々話していたこ
とが実現したのが、二〇〇六
年八月十八日、秋田県羽後町
西馬音内の盆踊りである。歴
史も古く郷土に根付いた踊り。
(昭和五十六年一月、国の重
要無形民俗文化財に指定)

豊年祈願や盆供養のために
始められたという伝統行事。
闇が深まり、山の稜線が暗
さに霞む頃、太鼓や三味線と
笛、それにつづみと摺り鉦な
どが囃子歌を一段とヒートア
ップしている。

西馬音内盆踊りの特色は、
踊り手は圧倒的に女性が多く、
美しい踊り子の「端縫い衣
装」は四種も五種もの絹布を
端縫いしたもので、祖母から
母へそして子供へと受け継が
れ故郷に生きる女たちが優雅
に夏の夜を舞う。

鳥追い笠風な編笠で顔を隠

し、艶やかな着物姿で、しな
やか過ぎるほどの指先の動き
や地面の砂を擦りながら運ぶ
足さばきと身体をそらし反転
した時に見せる、秋田美人の
白いうなじに魅了される。

一方、踊り用に染められた
「浴衣」の多くは手絞りの藍
染めものを着て、黒い覆面の
「彦三頭巾」と呼ばれる奇妙
な被り物、長い黒い布を縫い
合わせ、腰の辺りまで垂れる
頭巾の眉間に目玉のような貝
ボタンを縫い付け、三つ目が
「かがり火」に浮かび上がる
黒覆面姿は亡者踊りを連想さ
せ何となく不気味な感じ。

ただ、ひたすらに単調な声
無き踊りに、同じ旋律が際限
なく繰返され、それが故に見
ている者をその世界に引き込
んで行く。

想像を絶するほどの感動だ
った。先祖を敬うと言う日本
の夏祭りの原点を見た思い出
であつた。

(上志津 高橋 佐久二)

出会いの人生 輝いています

出合い かくも素晴しき人
生かな。佐倉に来て十八年、
多くの良き出合いあり。まず
は図書館で一冊の本に出会う。

「小出監督のマラソン理論」
そして岩名で、Qちゃんこと
高橋尚子に出会う。ここから
私、ランナー熱に冒される。
毎日走る。有酸素運動が、脳
の活性化に良いと実感する。

これが私の人生観を変えた。
単なる仕事人間から、エンジ
ョイ健康人間へ変身。走れば
ランナー仲間次から次へと
出会う。とりわけ佐倉の友、
五十代のパソコン事業者 男
四十代の料理店シェフ 男
三十代の才色兼備 女

汗をかいた後のお酒は格別、
つまみは人生訓(本当はダジ
ヤレ付きの自慢話・失敗話)。
「継続は力なり」、走力上昇。
市民大会に出る。また出会う。
そして今、六十三才の私は
「しづ市民大学健康学」を受

講。またまた健康仲間と出会
う。この懇親の場で、自己P
Rをした。私の特技はマラソ
ン。夢は壮年の部で表彰台に
立ち、そして今日まで出会う
た仲間と美酒をくみかわすこ
と。

これからも新しい出合い求
め走り続けます。多くの大い
なる出合いが待っていると。
更なる人生の輝きがあると信
じて。なぜなら私はまだまだ、
発展途上にある。若者ですか
ら。

エピローグ
美酒をいつ飲むのかつて?
それは才色兼備の彼女が100km
世界選手権二連覇達成のとき
パソコン事業者は自慢の

テクで表彰状を!
シェフは超特別メニューを!!
私は美酒たらふく飲むのみ!!!
あゝ輝しきひとときかな。

(西志津 白石 義孝)



11月の黒板

佐倉市民カレッジ文化祭のお知らせ

佐倉市民カレッジ生が、日頃の趣味の成果や研究発表などをおして多くの人との新たな交流と親睦を深めることを目的として行います。是非ご来場ください。

期 間 11月14日(火)～18日(土)

時 間 午前9時30分～午後4時 (18日は午前11時まで)

会 場 中央公民館

内 容 展 示 絵画・写真・工芸・書・盆栽 他

模擬店(14日～18日) 研究・活動発表(14日)

イベント マイカレンダー(15日～17日)

手打ちうどん(15日～16日)

園児と遊ぼう(16日) その他多くのイベントが開催されます。

問い合わせ 佐倉市立中央公民館 (第2・第4月曜日は休館日です)

電話 485-1801

URL <http://www.city.sakura.chiba.jp/kominkan/cyuou/index.htm>

たぐら道

久し振りに「高村光太郎詩集」を開いた。何故この本を取り出したのか、今考えると、安倍新総理が「美しい日本」を強調することに、何か釈然としないものを感じ、それに触発されたらしい。光太郎の真善美を追及するひたむきな心や、人生に対する純朴で誠実な態度があふれ、人間への思いやりの籠る詩の数々に再び会し嬉しかった。「牛」「冬の詩」等は今でも好きな中の一つだ。

こんな詩をじっくり読み、光太郎の心がとらえる人間性と人間社会に付いて、お互いに感想を語り合い、心を通わせ、相手を理解する寛容さをもつて、現代を、前向きに見直していけば、自ずから、本当に美しい国や社会や人間がみえてくる筈である。ここから美しい国づくりが始まるのだと思う。

あがとき



齋藤雄さんの「ふるさと自慢」に登場した、にかほ市人口三万人の代表「TDK」が、横須賀市四十二万人の代表「日産自動車」を決勝戦で破り見事初優勝を遂げました。直後「TDK野球部」に、にかほ市から初の市民栄誉賞が贈られたとのことです。おめでとうございます。

残念ながら「本荘高校」は

初戦で「天理高校」に惜敗しました。

「なかま」は十月に三周年記念号を発行することが出来ました。これも我々の先輩達が営々と地道に積み重ねてきてくれたお陰です。「継続は力なり」と言われます。今後ともますます「なかま」の内容を充実させていきたいと思っております。

そのために読者各位より自由闊達な原稿のご投稿を心よりお待ちしております。

(島田)